

俳諧
水滸

宇和野奇人集

^ 13
3137
1



阮小五がのろくは清く水は澄みさきもと見えど花柳の
尾を奴もまくるはさうなく肥擔桶一落さうどかの史とと書來
少くとも一き閑活林題まお小流の流行ふりづき作の道
まこと有るは。十有林亭が主人月流は鳴一悲張るひ式を酒居
興をさるふさう一男のさりのさうとさ人まかすひて面への見聞
輕口獅子似さうとと切書さうととさるま其小冊を柳譜の解序と
題すの彼まの條の敷さあひひ百への括あさうかり手是と謂補
まられたる得さうひて遠出の括を抄過さうとと類のさうさ
有り儘のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
いさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

水は酔ありに母め度く日さうととさうととさうととさうとと
通ふ座自ら持た鼓の字もを因あさん傳さうととさうととさうとと
其大報の音ありと笑つとさうととさうととさうととさうとと
ゆがゆが梅の末も刻ありか人このみ味と周の縁あさうとと
さうとと 錦八がさうととさうととさうととさうととさうとと

天保丁酉孟陽

浅州閑人

柳亭種彦記

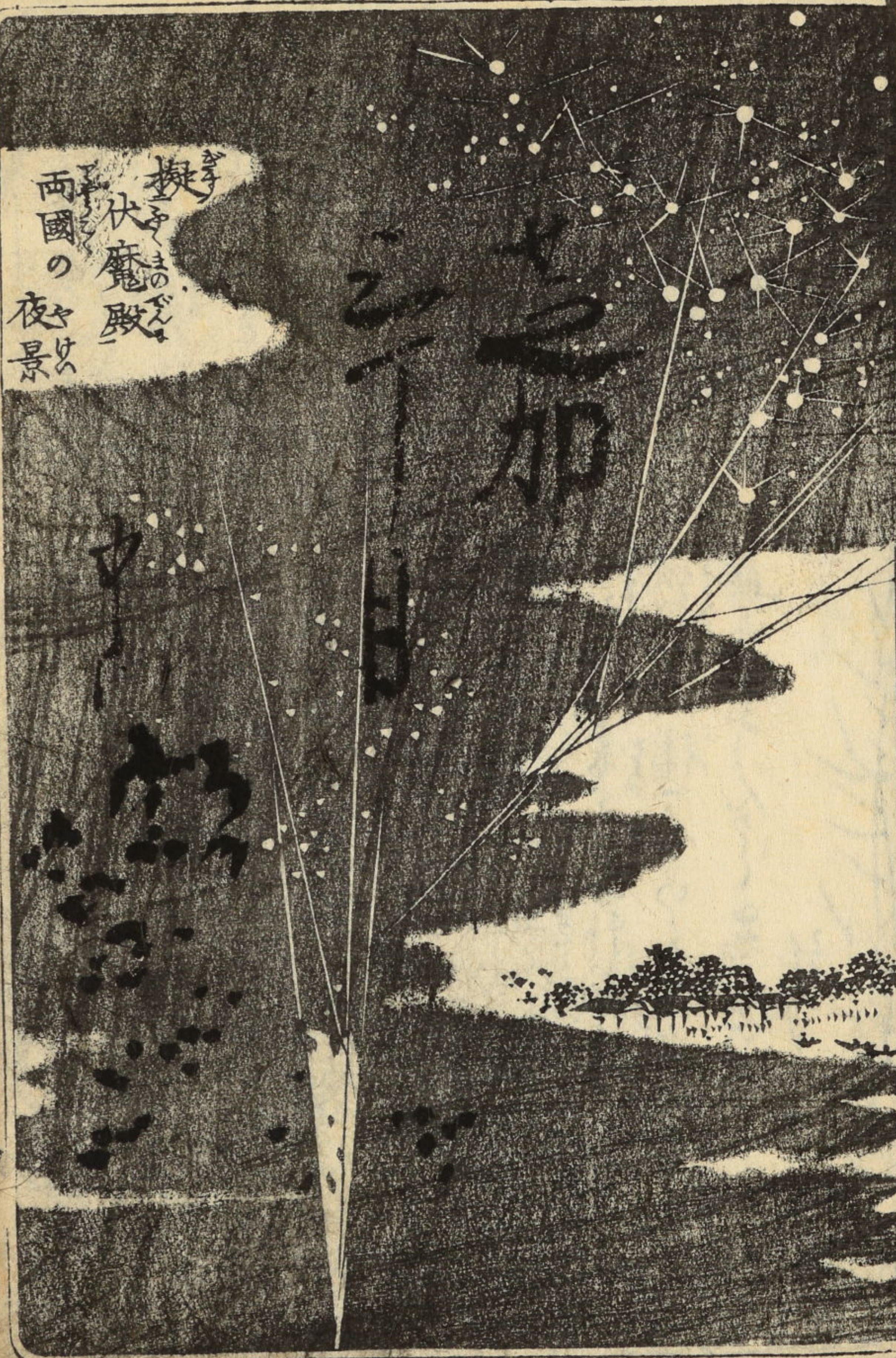


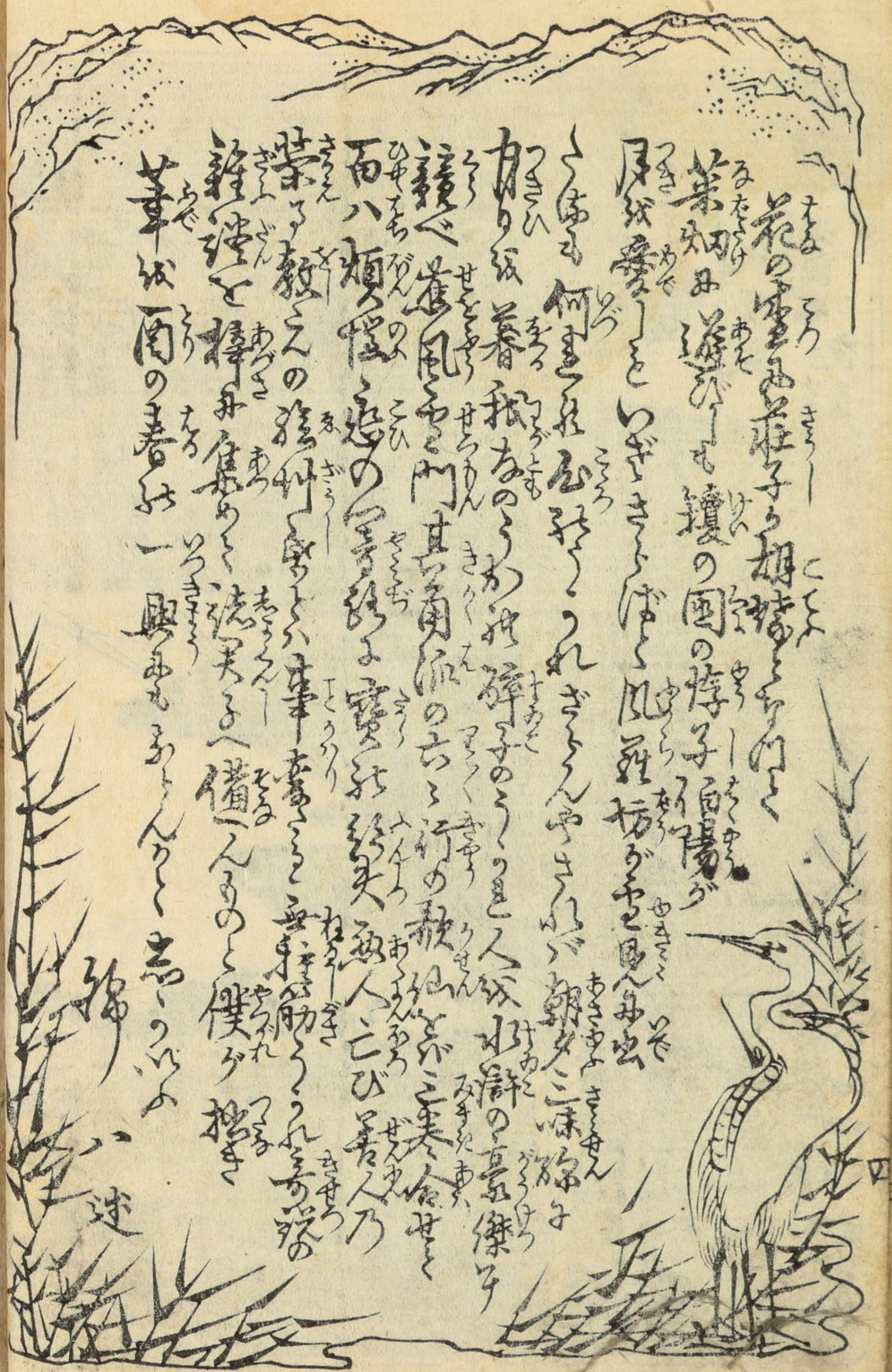


朝採樓
 芳女

競きんぎょ
 龍虎山りゅうこざん
 富岡乃とみおかの
 不二ふた







花の室に在り相好むるを
 葉知ぬ遊びも瓊の園の存子白陽が
 月夜夢をもいぎささるべし凡死妨がも見えぬ
 何れをいふもこれぞいふやさしむ朝夕二味ゆき
 加りぬ春我々のうかれ碎子のうらさく人成水辭の真景傑
 鏡の雀風を門其南流の古く行の秋山茶二美命せ
 百八煩悩の患のいふは空の空人二比善人乃
 業の教への強州へ寄るとは事なきも無事助うるは善人の
 経法と擇舟集めく法天子へ備えんものへ僕が拙
 草紙一冊の善人一興もあらんくもいふ
 物ハ述

水滸
俳諧

守加連奇人集卷之上

東都

青林亭錦八著

江戸座歌仙

ちをけりて笑ひゆり夕も凡

深川

喜久亭壽樂

千葉家の法用達あり依名は竹雨とら客裁小勇批の真似が
 好みて一日通家の連中を集め「コウ 壽樂 今日皆が國芳に
 葉で彫物残書く貴人の職人の喜似を北野の國芳
 向くやうに「コイワ ねりらの熱向をぶせんとまらう國芳
 の室不織り右のおもむきは 出す小元より心なき事やまら
 早湯よ書流り時刻もよと 罌子帆をけりて急ぐやまら大
 門よまらけりて急ぐやまら 駕籠籠がかりて川原のあき 森田屋に

の井戸下より二三日経て居橋港より遠江のかりをゆく
ふと京内み園年あるとてその下世と違ひみかりは
唐あけたり「むらんまきの手」私どのの末をまのあり外う「ア
末をまきんハ笑二階おかるうらとひていつとくさうのひを
「今あのがさうとて外ト二階ふあを中とのなまの遠入に
めん米をまは指さやまう「ア米をま」

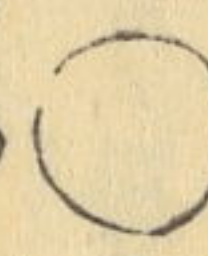


同

身の疎有 大目 坊 丁子屋和十

本場の仙果の心鬼めて相馬市所吉本のゆり花とらへ茶
支那とあうけきき相する平太弟良門の遊みあう誓書
海とあうみ序幕より太流の幕あすくと新相馬前
は殿の齋りめく良門の孫娘あうと取巻の大將へそんや

道とあう本名とあうのりく「海とくと思ひのかかへん我ら孫
らまうよあかやうなうらもあうはまん玉親王将門の一子相
平太弟良門の心伝かすやうとみえあうさうさうけ小持
うら白旗の亡父の霊あて堂中へ飛さる狂言なるのけのらあ
白旗のあう髪之藏はあうあうあうあうあうあうあうあう
うら白旗とこの小娘はあうあうあうあうあうあうあうあう
とあうひけん「アア怪」やあ父の亡霊あて髪をてあうらうしはナア



ゆりあう馬鬃あう橋の巾 櫻川由次郎

古人善孝夫人の悴あう幼あう時より養方備り流し
ゆりあう櫻川の各路公嗣を今異小芳名かり実子梅屋の
二あうよりあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

おのか化ちあんごへそ具のこ城入道よ「こはあんごへ」新の
か化よ「こはあんごへ」まの「目小僧よ」ちやんやいあつそ一をん
ちうののあんごへ「こはあんごへ」目小僧があらうらう「そんあ
一ツ目小僧のま似かしくお母さん似かしくそま今う終へト
そまより母の所へまよりそを隠せバ子か又一ツより二ツのぶが
かんと又親を敷めて「二ツ目小僧ウ

○ 宝座百助
素人の時より義守侍りく選が好りく「あつぬお宿お
又りやうそ宿へく宿へく宿へく宿へく宿へく宿へく宿へく宿へく
けいそを親類へおけておまをれぬとせんと侍りく

○ 清元全助
ゆりまらけまの多く異うんかかへみまへら面りかき
長徳後ゆえ思ひも小おまて鼻明かぬいし親父乃
耳へ入令しそ親類を後へくおまの棒よく打て
かまがこハ濁るぬと返出すは後まきまき不登城しつひかまき
あつらひる向ふより中あ場のおちまお通りあてそまを
より百助以捕まへ親父おむい「コリヤそまへらせとまき
へいまきまの將でむらり外

○ 清元全助
今年十一まにある直捨らう將そく人あけま生まがみ
喬才侍り清元の名を以て名をよきまめしめかきまね
ゆえ具の自のあまのまけまはけまのそまをて法引けお

内でも物移へか「内母やア物怪がねくくお直くくちちやんや
物怪がなけやアアのもの通り物ねか

庚章

清元采次郎

かけ深き進子の毎日ながく
源の因幡くたつとつと田舎者の下や附て牌をきし
物くぬりきり「ちやんや今ぬつこま「坊う早くこのお用怪の
面白く「ちやんやお忠の怪談この美なる婦人さんぐ物をこんこ
飛くともらぶのきくか化物成えて事よ「そりやアよか門この
「ちやんや「さうして袋細ユもみてきよ「さうくまこせふや
くく心直く「あまらのたらや袋細ユ「評判がけくくけごらに
おまわりや「さきこえやうとちかぶどうご「ハイけくくおれりもせんが
軍のくごの物ごの魁ごのそまうく島くく不剛常人がを

「このも「十三のく人か「仁田の座席
物を「還路てのく「何身形さる「象を「おの井口が
「おの物く「さのまひりうく「おの物か「おの
「さのく

水滸
非諸

宇和島奇人集卷之上終

い

